

L2英語における目的語格標示：日本人英語学習者の 発話コーパス研究

野 地 美 幸*

(平成19年9月28日受付；平成19年11月7日受理)

要 旨

日本語と英語は類型論的に見ると共に主格対格言語 (nominative/accusative language) であるが、日本語には、英語に存在しない主格目的語構文 (nominative object construction) が存在する。つまり、日本語は目的語であっても (述語が状態動詞の場合) 主格に標示されうる。本研究では、Schwartz (1998) や Schwartz and Sprouse (1994, 1996) の唱える完全転移仮説 (full transfer hypothesis) の予測するように、この違いが日本語母語話者のL2英語文法における目的語格標示に影響を及ぼすことがあるのかを検証する。日本人英語学習者の発話コーパスの分析の結果からは、完全転移仮説の予測に反して、日本語の主格目的語がL2英語の格表示に影響しているという明示的証拠は得られなかったことを報告する。

KEY WORDS

日本人英語学習者 Japanese learners of English (JLE)

目的語格標示 object Case-marking, 母語の影響 L1 influence

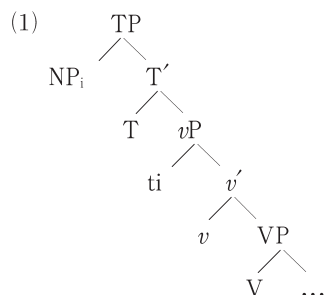
主格目的語 nominative object, コーパス研究 corpus study

1. 本研究の目的

言語は格標示システムの違いから類型論的に2つに大別される。英語や日本語のように原則として他動詞と自動詞の主語が主格、他動詞の目的語が対格、で標示される主格対格言語と、バンツ語やジャカルタ語のように原則として他動詞の主語が能格、他動詞の目的語と自動詞の目的語が絶対格、に標示される能格絶対格言語である¹。日本語と英語は共に主格対格言語なのであるが、日本語は英語と異なり、目的語を主格に標示しうる場合がある。この日英語の違いがL2英語の格標示に影響を及ぼすことはあるのだろうか。そしてまたあるとしたらその影響は発達が進む過程でどうなるのだろうか。英語は格の違いが代名詞にのみ形態の違いとして現れる言語である。そこで本研究では目的語位置での代名詞の格変化を調べることで、こうした疑問を明らかにしたい。

2. 主格標示のメカニズムと日英語の違い

本節では主格対格言語において主格標示がどのように行われるのかをまず考えてみよう。主語、目的語といった文法機能 (grammatical function) は名詞句が統語構造上どの位置に現れているかによって決まるとされている。Chomsky (1986) 以降、文は動詞句を捕部 (complement) として取る機能範疇 (functional category) の最大投射 (maximal projection) であり、主語はその指定部 (specifier) の位置に現れると考えられている。ここではChomsky (1995) に従い次のような文構造を仮定する：



主格素性を持った主語名詞句は vP の指定部に生じ（VP内主語仮説）、TPの指定部へ顕在的に（overtly）移動する。この移動はTに含まれる強い EPP素性（D素性）により駆動される。主格名詞句は同じ主格素性を持った（つまり時制を持った）Tと格照合を行うことにより、(2)のHeのように結果として主格名詞句として実現することになる。TP指定部の名詞句がHimのように主格以外のものであった場合には、Tの主格素性との間で不適合（mismatch）が生じ、派生は破棄（cancel）されることになる。

- (2) {He/*Him} read the book.

また、動詞が主語との間で一致（agreement）を示したり、時制による屈折（inflection）を起こすのは、動詞が顕在的に v まで移動し、LFでさらにTの位置へ移動することにより、Tの一致素性および時制素性と照合が行われるからである。

英語を例にTが主格照合を行っていることを示したが、日本語でも主格照合はTにより行われると考えられている（Takezawa（1987））。ただし、主格照合に関する日英語の違いとして、(3)のような主格目的語構文の存在がある：

- (3) a. 真理は{*その曲を/その曲が}好きだ。
b. 和夫は{*ピアノを/ピアノが}得意だ。

日本語の状態動詞は目的語をとる場合、(3)が示すように主格の目的語を取るのである。

また、通常対格目的語を取る他動詞に可能の意味を表す-(rar)eや願望を表す-ta（どちらも状態述語）が付くと、目的語が主格としても実現可能となる。例えば(4)の「話す」はそれ自体対格目的語を取る他動詞であるが((4a)), (4b, c)のように主格目的語も可能となる：

- (4) a. 彼は {韓国語を/*韓国語が}話す。
b. 彼は {韓国語を/韓国語が}話せる。
c. 彼は {韓国語を/韓国語が}話したい。

こうした主格目的語の格標示に関して、Takezawa（1987）は日本語のI（(1)のTに相当する）は主語名詞句のみならず（述語が状態述語である場合には）目的語名詞句の格標示も行うとする分析を行っている。またKoizumi（1994, 1995）は、目的語が主格になると（通常Tと v の間に介在すると仮定されている）否定辞よりも広い作用域を取り得ることを証拠に、主格目的語の場合も主格主語の場合と同様にTが格照合を行っていると同主張し、実質的にTakezawaの主張の裏付けを行っている（cf. Tada（1992））。

以上本節では、(i)主格標示が主格照合の結果として起こってくることと、(ii)主格標示が英語では時制文の主語に限られるが、日本語では状態述語の場合（あるいは他動詞でも状態述語と複合動詞を形成する場合には随意的に）その目的語も主格標示されるという違いがあること、を見てきたことになる。

3. L2英語での格標示

本節では第2言語獲得（second language acquisition, 以下SLA）研究の中で、L2英語を対象に格標示がどのように行われるかを問題にした先行研究についていくつか概観することにする。

3.1 格素性の存在と具現について

Lardier（1998）は中国語を母語とする英語話者Pattyを対象に自然発話資料の収集を行った。1回目と2、3回目は約6年半の間隔をあけて資料収集を行っている。この発話資料の分析の結果、3回共、代名詞の主格標示は完璧であるにもかかわらず動詞の時制の屈折が34%の補充率に止まっていることが明らかになった²。主格標示については、時制節の主語位置で代名詞の主格標示が正しく行われているかを調べているが、3回共間違っただけで格標示された例は一例もなかったと報告している。L2英語の格標示に関してこの事例から言えることは、主格や目的格を形態的に区別しない言語（この場合中国語）を母語とする英語学習者が、中間言語の発達の過程で英語の主格標示に関しては母語話者並に到達するということである。

主格標示が完璧であるにもかかわらず時制による屈折の補充率が低い原因について、Lardiere (1998: 20) は、弱連続性 (weak continuity) 仮説の下ではTPが存在しないことになり格標示が完璧であることが説明できないとして、統語構造自体の問題というよりは書き出し (Spell-Out) 後の形態素の実現に問題があるのではないかとしている。これは後にPrévost and White (1999, 2000) の表層的屈折欠如仮説 (Missing Surface Inflection Hypothesis, 以下MSIH) に繋がっていく考えである。

この種の問題に関してMSIHとは異なる立場を採っているのが、Hawkins (2005), Tsimpli and Mastropavlov (2007) 等である。彼らは、Chomsky (1995) のミニマリスト・アプローチを採用し、解釈不可能な素性の獲得は臨界期に従うという解釈可能性の仮説 (interpretability hypothesis, 以下IH) を提唱している³。Hawkins (2005) はLardier (1998) に言及しIHの下で次のように説明している：中国語の動詞は解釈不可能な時制素性をもたないの、L2英語でこの素性の獲得は臨界期を過ぎているために困難になる。一方、明示的ではないにせよ名詞の解釈不可能な主格素性はもともと中国語でも存在しているので、L2英語の主格標示は完璧になり得る。

以上、格素性の存在と具現に関してLardier (1988) のL2英語の事例を紹介し、その説明についてはMSIHとIHの2つの考え方があることを見てきたことになる。

3.2 SLA初期段階の格標示

Suda and Wakabayashi (2007) は主格目的語の存在に関する日英語の違いに着目し、JLEを対象に代名詞の格標示について調べている。Schwartz and Sprouse (1994, 1996, 2000) 等の完全転移完全接近 (full transferfull access, 以下FTFA) 仮説を含む3つの仮説の妥当性を検証するというのがねらいであるが、FT/FAが正しいとすると日本語を母語とする初期英語学習者は(5)のような文を容認するであろうという予測を立てている⁴。

(5) He likes she.

タスクとしては日本語の文脈の一部に「彼が彼女が好きだ」のような文を入れ、その部分の英訳として、与えられた8つの英文がそれぞれ正しいかどうかを判断させるというものであった。状態述語を使った日本語文の英訳で主語と目的語を共に主格にした（すなわち日本語の主格目的語構文の影響があると考えられる）英文が41～49%（答えに一貫性があると考えられる被験者に対象をしぼった場合29～44%）容認されたと報告している。この結果は上記予測と合致する。しかしながら、主語も目的語も対格の英文を容認する被験者もあり、FT/TAの予測に反するとして、結果的に彼らはFTFA仮説を棄却している。

彼らの実験には問題点もあるように思う。まず、被験者には日本語文の英訳となりうるかを（日本語文1つにつき8つの英文を1つずつ示して）判断させているので、（例えば「彼が彼女が好きだ」という）日本語文に引きずられて主格目的語を許容している可能性も排除できない。

また、彼らの研究では代名詞を習った時期により被験者がグループ分けされており、個々の被験者について代名詞が「獲得されている」のかは不明である。よって主語・目的語とも主格の文（そしてまた、彼らが許容したとの報告がある主語・目的語とも対格の文）が母語の影響で容認されているのか、あるいは代名詞が獲得されていないために容認されているのか、の区別が困難である。

こうした問題点を踏まえ、日本語に主格目的語が存在すること、言い換えると日本語のTは（状態述語が含まれている場合）目的語の格をも照合するという、JLEのL2英語の格照合に影響を及ぼすかどうかについて引き続き検証を行っていく必要があると言えるであろう。

4. L2資料

4.1 仮説

3節では主格標示についてSLAの先行研究を概観したが、Lardier (1998) の研究では格標示の形態的実現に関して母語と対象言語が異なる事例について扱っており、Suda and Wakabayashi (2007) は主格標示の対象となりうる要素（主語か目的語か）に関して母語と対象言語が異なっている事例について報告している。本研究では後者の違いに着目し、JLEのL2英語でどのように主格標示の獲得が進行するのか、産出のレベルでの中間言語の発達過程を明らかにしたい。具体的には次の2つの仮説を立てて検証して行くことにする：

仮説1 FT仮説が正しいとすると日本人英語学習者のL2英語文法は初期状態では日本語の特性を完全に受け継いでいるので、特に初級レベルの英語学習者の発話には目的語が誤って主格標示された文が現れるであろう。

仮説2 さらに、FA仮説が正しいとすると、この格標示の誤りが起こる頻度は習熟度が上がるにつれ減少するであろう。

4.2 コーパスの概要と被験者

本研究では、和泉等（2004）のThe NICT JLE Corpusを用い、コーパスに収録されている1281人の日本人英語学習者の発話を調べることにした。

まず、コーパスに関して簡単に説明する。The NICT JLE Corpusは、米国の全米外国語教育協会（American Council on the Teaching of Foreign Languages, ACTFL）が中心となって開発したOral Proficiency Interview（OPI）を基にACTFLと（株）アルクが開発したSST（Standard Speaking Test）の音声資料を書き起こし、タグを付与したものである。SSTは5つのステージからなり、それぞれのステージは、1.ウォームアップ、2.イラスト描写、3.ロールプレイ、4.絵を基にしたストーリー作成、5.簡単な質疑応答、の内容となっている。本研究では全ステージを調査の対象とした。また、日本人英語学習者はレベル1からレベル9までレベル分けされているが、これを習熟度を測る基準としてここでも採用することにした。

4.3 結果

英語では格が明示的に示されるのは代名詞に限られるため、代名詞の格標示がどのように行われているかについてまず他動詞構文の目的語位置での状況を調べた。目標言語に合致する振る舞いが見られるとすれば、（英語は目的語位置での格標示はすべて対格に表示されるので）代名詞も対格として実現するはずであるが、結果は表1の通りである：

表1 L2英語における目的語の格標示

	SST レベル									計 (n=1281)
	1 (n=3)	2 (n=35)	3 (n=222)	4 (n=482)	5 (n=236)	6 (n=130)	7 (n=77)	8 (n=56)	9 (n=40)	
V <i>he</i>	0	0	3(1)	4(1)	0	0	0	0	0	7(2)
V <i>him</i>	0	0	23(10)	59(16)	46(9)	36(3)	19(0)	16(1)	17(2)	216(41)
V <i>she</i>	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
V <i>her</i>	0	2(1)	13(5)	58(12)	49(12)	27(3)	18	13	8	188(33)
V <i>they</i>	0	0	0	1(1)	0	0	0	0	0	1(1)
V <i>hem</i>	0	0	12	87(1)	108(9)	39(1)	30(3)	30	24(2)	330(26)
V <i>I</i>	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V <i>me</i>	0	3	54	163(7)	134(3)	96(5)	66(2)	55	32	603(17)
V <i>we</i>	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
V <i>us</i>	0	0	4	15	2	8	2	1	2	34
V <i>Nom</i>	0	0	3	6	0	0	0	0	0	9
	0.00%	0.00%	2.75%	1.55%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.65%

*（ ）内の数字は日本語の状態動詞に対応する動詞が使用されている文の数を示している。

目的語位置で誤って主格に標示されてしまうという誤りはSSTレベル3、4の被験者に限られ、全体では9例あり、次のような文であった：

表2 目的語位置での格標示の誤り

ファイル名	SSTレベル	文
file01135.stt	3	Very love I <u>love</u> <u>he</u> .
file00559.stt	3	And I <u>teach</u> <u>he</u> I I tau I teach him ...
file00921.stt	3	So uhm my father um <u>called</u> <u>he</u> ...
file00187.stt	4	...in a New Year's day I <u>met</u> <u>he</u> I <u>met</u> <u>she</u> .
file00065.stt	4	And therapist erm wa want to <u>care</u> <u>he</u> ...
file00065.stt	4	therapist urmm therapist <u>teach</u> <u>he</u> him, ...
file00124.stt	4	... ten years ago I don't <u>like</u> <u>he</u> him, ...
file00412.stt	4	I <u>like</u> <u>they</u> I like them ...

表2から明らかなように、格標示の誤りが起こっている代名詞に関して9例中8例が3人称単数の代名詞であった。また、動詞に着目してみると、状態動詞としてはlove, likeが使われ、その目的語位置で誤って主格標示されているのが3例(33%)であった。したがって、潜在的に日本語の主格目的語の影響で主格となっている可能性がある例は全体で3例しか確認されなかったことになる。3例という誤りの数自体非常に少ない数であるが、そのうち2例については対格代名詞に言い直す修正も見られた。

問題はこの3例が日本語の主格目的語の影響と言えるかどうかであるが、まず事実として表1, 表2から、状態動詞以外の動詞の目的語位置でも主格代名詞が誤って用いられていることがわかる。この状態動詞以外の場合について(4b, c)の日本語で起こっているような仕組みが働いているとも考えにくい。主格目的語の影響があるとする、日本語の状態述語に相当する述語が用いられている場合に誤りが顕著に見られるはずであるが、表1で示した結果とは一致しない。

次に、この表1の結果を主語位置の格標示の状況と比べてみよう。主語位置でも格標示の誤りがあるとする、目的語位置での誤りは必ずしも母語の影響と言えないことになる。同じ被験者を対象に更に調査した結果、主語位置での格標示については表3のような結果が得られた：

表3 L2英語における主語の格標示

	SST レベル									計
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	
	(n=3)	(n=35)	(n=222)	(n=482)	(n=236)	(n=130)	(n=77)	(n=56)	(n=40)	(n=1281)
<i>he</i> V	0	41	465	1621	1151	857	514	432	361	5442
<i>him</i> V	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1
<i>she</i> V	0	51	824	2817	1433	734	333	240	172	6604
<i>her</i> V	0	1	1	6	2	0	0	0	0	10
<i>they</i> V	0	73	565	1627	1062	379	510	357	370	4943
<i>them</i> V	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
<i>I</i> V	3	420	6268	20146	12759	8410	3715	1897	652	54270
<i>me</i> V	0	2	0	5	2	0	0	2	0	11
<i>we</i> V	0	10	558	2094	1348	748	641	460	411	6270
<i>us</i> V	0	0	0	2	0	1	0	0	0	3
<i>Acc</i> V	0	3	2	14	4	1	0	2	0	26
	0.00%	0.50%	0.02%	0.05%	0.02%	0.01%	0.00%	0.06%	0.00%	0.03%

調べるに当たって、まず時制節の主語位置を主格標示が義務的に起こる位置と見なした(2節で述べた格照合のメカニズムを参照)。そして主語代名詞の格標示に関して、平叙文では定形動詞の前に、疑問文など倒置が起こる文では定形動詞の直後に、現れている代名詞を原則的に「主語位置に生じている代名詞」と見なし、格変化を調べた。ただし、L2英語学習者がcookedの-edといった接辞を落したり、定形のbe動詞を落とすことは「任意不定詞(optional infinitive, 以下OI)」現象としてL2でもよくあることが知られており⁵、本コーパスにおいても(6)のような例が多数見られた。

(6) I always ready for my lunch ... (file00141.stt)

そこで、主述語(main predicate)が現れていて、その主語と見なしうるこのIのような例も含めて「主語位置に生じている代名詞」とすることにした⁶。また、表の中では代名詞を小文字で表記しているが、大文字で始まっているものも対象として含んでいる。

表3の結果から、主語位置に関しても主格の代わりに対格が用いられる誤りがあり、数としては全部で26例あることがわかる。このうち15例は(7)のように等位接続が絡んだものであり、目立った誤り(全体の58%)となっている：

(7) a. And I and them go to Korean's customer site. (file00997.stt)
b. And he and her were going to their home. (file00412.stt)

目的語位置での格標示と比べるために等位接続の例を除くと、代名詞の格の誤りとしては次のようなものがあることが確認された：

表 4 主語位置での格標示の誤り（等位接続の例を除く）

ファイル名	SSTレベル	文
file01123.stt	2	<u>Her</u> eat ice cream.
file00961.stt	2	<u>Me</u> go to...
file00961.stt	2	... <u>me</u> go to you Daikan-yama?
file00187.stt	4	<u>Her</u> speaks every time same things.
file00187.stt	4	<u>Her</u> want to her wanted to buy ...
file00412.stt	4	... her <u>her</u> look at the box and ...
file00631.stt	4	When she went home <u>her</u> found shoe shoes ...
file00722.stt	4	But I I <u>us</u> I I don't use P C ...
file00871.stt	4	I <u>us</u> I tend to use car ...
file00254.stt	6	I I <u>us</u> I sometimes read book ...
file01263.stt	8	<u>Me</u> I just talk and ...

目的語位置とは異なり主語位置ではSSTレベル5以上の被験者のファイルにも格変化の間違いが含まれていることがわかる。ただし、そのいずれも直後に言い直しがあり訂正がなされている。こうした違いはあるものの、JLEの英語発話には主語位置で主格ではなく対格の代名詞が使用された文が含まれていることが明らかになった。したがって、表1、2および表3、4の比較の結果からも、目的語位置で主格標示が起こるのは日本語の主格目的語の存在が影響しているからではないということが示唆される。

結果を簡潔にまとめると、まず、JLEの発話には他動詞の目的語位置で主格代名詞が誤って使用されている文が数は少ないが存在することが明らかになった。しかしながら、(i)その代名詞と共に起している他動詞が必ずしも状態動詞に限らなれていないこと、そしてまた(ii)主語位置でも同様の代名詞の誤用があること、を考慮すると、それらの誤用が母語の影響で起こっているとは考えにくい。したがって、仮説1の予測に反する結果が得られたことになる。また、現象としては主格目的語を使用する誤用が習熟度が上がるにつれなくなることが明らかになったので仮説2と矛盾する結果ではないが、誤用自体が母語の影響とは考えにくいという結論からすると、仮説2については確認できなかったことになる。

5. 考 察

本研究は、JLEのL2英語文法では目的語への格標示がどう行われるのかについて調査を行ったが、代名詞の目的語を見る限り（対格ではなく主格を使うという）間違った格標示は獲得初期段階からほとんどなく（3%未満）、目標言語の用法に近づくことが明らかになった。一方、数としては少ないが見つかった格標示の誤りについて分析を行った結果、Schwartz（1998）やShwartz and Sprouseの唱えるFT/FA仮説の予測とは合致しない結果が得られた。この結果の持つ意味合い、すなわち母語の影響が産出レベルで確認できなかったことの意味合い、について更に考えてみたい。結論から述べると、証拠の欠如は欠如を示す証拠にはならないとよく言われるが、今回母語の影響を示す根拠が得られなかったからと言ってそれだけではFT/FA仮説を否定する証拠とはならないであろう。さまざまな可能性について考えなければならないが、1つは母語の影響が獲得の最初期段階で現れていてすぐに消えてしまっているという可能性である。White（2003）が指摘しているように、これはFT/FA仮説の反証可能性（falseifiability）とも結びついてくる問題で、常にこの可能性は排除されない。

もう1つは今回問題にした母語の影響が受容のレベルでは起こっているが産出のレベルでは表面化してこないという可能性である。受容のレベルでどうかという問題は、Suda and Wakabayashi（2007）で検討されているが、3.2節で指摘した問題点も踏まえさらに実験を重ねて詳しく検討して行く必要があるであろう。また実験に際しては、日本人英語学習者の他にできれば英語と同様に主格主語を許容しない言語をL1とする英語学習者も被験者に加え（つまり主格目的語が存在するかどうかという点でL1が異なる2つのグループの英語学習者を対象に）、主格目的語を許容するかどうかについて学習者間に違いがあるかどうかを見ていくこともFA仮説の検証に有効であろう。

註

¹ この格システムの違いに関わるパラメーターについての詳しい議論はMurasugi（1992）、Bobaljik（1993）を参照。

² この事例は化石化（fossilization）現象の典型として取り上げられることが多いが、化石化現象自体なぜ起こるのかについ

での説明は一致した見解に至っていない。

³ Hawkins (2005) はIHのことを表示不全仮説 (representational deficit hypothesis) と呼んでいるが同様の趣旨である。

⁴ FT/TAに関して彼らは次のような予測も立てている：

(i) 日本語はSOVと並んでOSVの語順も可能なのでOVSも容認するであろう。

(ii) パラメーターがリセットされれば主語を主格に目的語を対格にしたSVOも容認されるようになるであろう。

(i)については、予測の部分でなぜOSVではなくOVSなのか不明である。まず第一に主語が動詞の後にくる文（右方転移構文）というのは日本語では特殊な文であるということ、そしてまた彼らの実験では後で述べるようにSOVの（解釈が適切な）日本語を与えてその英訳を考えさせているということ、この2つの理由で(i)は予測として成り立たない可能性がある。

(ii)については詳しい議論はなされていないが、結果として主語を主格に目的語を対格にしたSVOを容認する被験者が増えていたとの報告があるので、予測と合致する結果であったと言えるであろう。

⁵ Ionin and Wexler (2002) は屈折が豊かなロシア語を母語とする子供のL2英語学習者に関してもOI現象が見られたことを報告しMSIHを支持する議論を行っている。

⁶ このように解釈すると(i)のような使役構文も含まれてしまう可能性があるが、このような事例は対象からはずし、あくまでも代名詞が定形節の主語と解釈できる場合に限定して調査を行った。

(i) ... have him examine what happened here.

参 考 文 献

- Bobaljik, Jonathan D. (1992) "On Ergativity and Ergative Unergatives," *MIT Working Papers in Linguistics* 19, pp.45-88.
- Chomsky Noam (1986) *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Hawkins, Roger (2005) "Explaining Full and Partial Success in the Acquisition of Second Language Grammatical Properties," *Second Language* 4, pp.7-25.
- Ionin, Tania and Kenneth Wexler (2002) "Why is 'Is' Easier than 's'?: Acquisition of Tense/Agreement Morphology by Child Second Language Learners of English," *Second Language Research* 18, pp.95-136.
- Koizumi, Masatoshi (1994) "Nominative Objects: The Role of TP in Japanese," *MIT Working Papers in Linguistics* 24, pp.211-230.
- Koizumi, Masatoshi (1995) *Phrase Structure in Minimalist Syntax*, Doctoral dissertation, MIT.
- Lardier, D (1998) "Case and Tense in the 'Fossilized Steady State,'" *Second Language Research* 14, pp.1-26.
- Murasugi, Kumiko G. (1992) *Crossing and Nested Paths: NP Movement in Accusative and Ergative Languages*, Doctoral dissertation, MIT.
- Prévost, Philippe and Lydia White (1999) "Accounting for Morphological Variation in Second Language Acquisition: Truncation or Missing Inflection?," in Marc-Ariel Friedemann and Luigi Rizzi (eds.), *The Acquisition of Syntax*, Longman, London, pp.202-235.
- Prévost, Philippe and Lydia White (2000) "Missing Surface Inflection or Impairment in Second Language Acquisition?: Evidence from Tense and Agreement," *Second Language Research* 16, pp.103-133.
- Schwartz, Bonnie D. (1998) "Second Language Instinct," *Lingua* 106, pp.133-160.
- Schwartz, Bonnie D. and Sprouse, Rex A. (1994) "Word Order and Nominative Case in Non-Native Language Acquisition: A Longitudinal Study of (L1 Turkish) German Interlanguage," in Teun Hoekstra and Bonnie D. Schwartz (eds.), *Language Acquisition Studies in Generative Grammar*, John Benjamins, Amsterdam, pp.317-368.
- Schwartz, Bonnie D. and Sprouse, Rex A. (1996) "L2 Cognitive States and the Full Transfer/Full Access Model" *Second Language Research* 12, pp.40-72.
- Suda, Koji and Wakabayashi Shigenori (2007) "The Acquisition of Pronominal Case-Marking by Japanese Learners of English," *Second Language Research* 23, pp.179-214.
- Tada, Hiroaki (1992) "Nominative Objects in Japanese," *Journal of Japanese Linguistics* 14, pp.91-108.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Washington.
- 和泉絵美, 内元清貴, 井佐原均 (編著) (2004) 『日本人1200人の英語スピーキングコーパス,』 アルク, 東京.
- White, Lydia (2003) *Second Language Acquisition and Universal Grammar*, Cambridge University Press, Cambridge.

Object Case-Marking in L2 English: A Corpus Based Study of Utterances by Japanese Learners of English

Miyuki Noji*

ABSTRACT

Japanese and English are of the same type in that they are both nominative/accusative languages. The former but not the latter, however, may have an object marked with nominative when the predicate is stative. The present study tackles the question of whether the difference would bring about an influence on object Case-marking in L2 English by Japanese learners of English (JLE), as the Full Transfer Hypothesis in Schwartz (1998) and Schwartz and Sprouse (1994, 1996, 2000) predicts. The results from the JLE speaking corpus used in this study show no clear influence from Japanese 'nominative objects.'

* Division of Languages: Department of Foreign Languages